

さくらそう通信

岩手県 いちのへまち 一戸町のサクラソウ

～ダム湛水地起源のサクラソウは今いずこ？～

希望と夢のサクラソウとして、本誌「さくらそう通信6号」で紹介をいただいた岩手県の一戸町のサクラソウは今どうなっているのでしょうか。ここに、14年間保護されてきたサクラソウの現状と経緯について、さいたま市教育委員会に感謝の念をこめて寄稿させていただきます。
(一戸町 ボランティアL事務局 小守一男)



◀本移植一年目の世話活動

1. 試験移植の世話活動（平成9年～平成12年）

移植場所（湛水地から200m、岩手県二戸郡一戸町平糖・釜石集落近くの沢通り）

ダム工事に伴うサクラソウの移植で、農水省ダム事務所とコンサルタント会社を中心に、一戸町と地域民、主として水没集落の方々、ボランティア団体「心に宝の地図を描く会」が共同で作業にあたりました。

移植後は、雑草の駆除や立ち木の枝払い、早春には周辺部の倒木の除去などの作業をしながら、季節の変化に合わせて、記録観察を継続的に3年間実施しました。本地は、自生のサクラソウもあって適地との判断から、施肥や薬剤散布などは一切しないままの観察です。

一年が経過した平成10年の開花数は、949株（開花率25%）、平成11年の開花数は1623株（開花率53%）、平成12年の開花数は1739株（開花率56%）と見事なものでした。

ところが見とれたのも束の間、冬期間にネズミ（種類は

未確認）に荒らされ開花率が極端に下がるダメージを受けてしまいました。サクラソウが根を張っている深さの土中に、ネズミがトンネルを縦横に掘ったのです。移植の際、敷いた稲藁が原因なのか、今まで姿を見せなかったネズミが一体どこからやってきたのか、会員の皆が呆気にとられてしまいました。

試験的な移植とはいえ、あきらめ切れず、丈夫なサクラソウを本移植することにしました。移植場所を思案しているうち、幸いなことに翌春オープンする「御所野縄文公園」が植栽を受け入れてくれました。

この試験移植で学んだことは、サクラソウのみを生かそうとして雑草皆無作戦をとると、予期しなかった事態が発生することです。試験移植の当初、旧浦和市教育委員会や磯田洋二諸氏を訪問し、サクラソウの保護について、「モニタリングには生態系の維持を基底に据えることが肝心」と、ご指導いただいたことを実体験した次第です。

2. 本移植されたサクラソウ（平成13年）

移植場所（御所野縄文公園：岩手県二戸郡一戸町岩館字御所野2）

こうして、試験移植の試練を通過して、御所野縄文公園植栽植物の一員として仲間入りする事になり、ダム湛水地起源のサクラソウが4年目にして本移植されました。

試験移植地からおよそ300株が、「心に宝の地図を描く会」と「ボランティアL」（L：Landscape）のメンバーによって、公園の一角（1aほど）に植栽されました。サクラソウが命の限り四方八方へと繁殖することを願い、高木の周辺に円状に植えつけました。

この御所野縄文公園は、国指定の縄文遺跡となっていて、公園内には縄文博物館や縄文時代の復元住居があり、平成14年のオープンに伴い、遺跡の案内はボランティア団体「御所野遺跡を支える会」が中心に活動していますが、植栽された植物の世話は「ボランティアL」が、サクラソウの植栽に引き続き世話を手伝っています。



◀本移植翌年のサクラソウ

3. 御所野縄文公園でのサクラソウ

300株のサクラソウは、四方八方に飛び火して繁殖するほど、伸び伸びと育っています。5月の開花時期には、花見気分にはさせてくれます。ヤマブキの側に競うように咲くサクラソウです。

「ボランティアL」は、毎週月曜日に見回りを行なっています。ハルジオンやメマツヨイグサのように頻繁に進入する帰化植物は、徹底的に排除しますが、クガイソウは自然のまま、タガネソウやフキなどの多年草はサクラソウの生育状態をみて適宜調整する等、サクラソウだけを育てようとしないで共存のなかで生育できるようにします。従って、サクラソウと相性のいい植物を捜し出すことを心がけており、現在、ヤブカンソウが注目されています。相性の一つの要素は、根の深さが同じではないこと、葉を広げて保水能力があることです。開花時のヤブカンソウの美しさはもちろん、サクラソウ一色ではなくて他の植物と共存のモザイク（ピンクとグリーン）が原風景であり、サクラソウが生育できる生態系の創造ではないでしょうか。

4. 御所野縄文公園での世話活動をいつまでも

サクラソウは、生態的に単独では生育困難、自然のままでは他の植物と共存が困難という極めて繊細で、人間と共生するために発生した植物のようにさえ感じられます。



◀御所野縄文公園のサクラソウ

それだけに、サクラソウが生育するには縄文遺跡公園の環境がふさわしい。まさに自然と人間の共生そのものです。

美しいサクラソウが目に入り、原風景が心のなかに広がるように願い、市民が心を寄せあってダム湛水地から守ったサクラソウを保護するために、世話活動をいつまでも続けていきます。

（一戸町 ボランティアL事務局 小守一男）

田島ヶ原のいきもの(No.5)

ーホトケノザ(シソ科)ー

早春、まだ野に咲く花の少ない頃、観察路の縁や近くの土手に、紅色の花を付けたホトケノザを見付けると、そこに小さな春があったようで心が和みます。

田島ヶ原では、草焼きを免れた越年草型の個体が3～4月に開花しますが、1年草型の個体は、早春に発芽して5～6月に、初秋に発芽して10～11月にそれぞれ開花します。

葉を見ると、上方の葉には柄がなく、下方の葉には長い柄があって、どの葉にも陽光が当たるほか、上方の葉の脇に付く小さな花がよく目立つようになっています。

花は、唇形に開いて良く目立ち、その唇形の所に蜜の在り処を示す紫紅色の円い斑点があって、昆虫を誘い他家受粉を行う花と、小さくて先が開かない閉鎖花で、自家受粉によって種子をつくる花があります。

春の七草のホトケノザは、キク科のコオニタビラコのこと、この植物ではないと言われています。



⇒は閉鎖花を示す

（さいたま市文化財調査専門員 磯田洋二）